

参考

＜芝川第1調節池における自然再生への取り組み（埼玉県さいたま市・川口市）＞

埼玉県の南東部で整備が進む芝川第1調節池では、治水安全度の向上と自然環境の保全を目指して、調節池計画地内のゾーニングを行うとともに、長期にわたる工事の進捗状況やそれに伴う自然環境の変化を把握しながら、状況にあった柔軟かつ多様な環境対策を専門家や地域市民団体参加のもとで行っている。（重要種の移植、動物の移動を考慮した構造物の整備等）

調節池が位置する見沼たんぼの自然環境の保全・創造、平常時における広大な空間の活用、治水機能と整合を図りながら、多くの生物が生育・生息できる自然性の高い空間や広く県民が多目的に活用できる空間づくりを目指し、学識経験者、市民代表、行政機関代表から構成される「芝川第1調節池環境整備検討委員会」が組織され、平成8年2月から平成10年3月にかけて開催された6回の検討の結果、環境整備の基本理念が次のように定められた。

基本理念

住民にとって安全な河川整備を行い
緑豊かな見沼たんぼの自然と調和し
多くの人々が憩い集う空間づくり

基本方針

【県民にとって安全な河川整備】

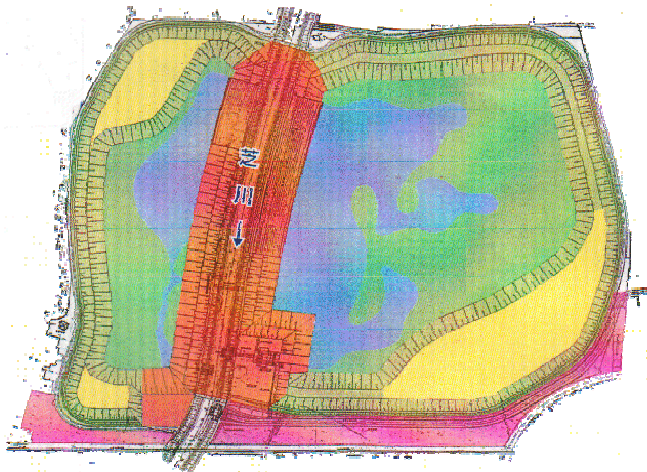
芝川の治水安全度の向上を図るとともに、大震災時の避難拠点となるような空間づくりを目指します。

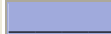
【緑豊かな見沼たんぼの自然と調和する第1調節池】

良好な環境の創造を行い、見沼たんぼの自然環境の保全、創造、回復に役立つような空間づくりを目指します。

【多くの人々が憩い集う空間づくり】

広く県民が身近な自然に親しめ、気軽に利用できる空間整備を行うとともに、誰もが安心してくつろげる快適な空間づくりを目指します。



凡例	
	環境創造ゾーン
	環境復元ゾーン
	空間活用ゾーン
	移行帯
	治水構造物ゾーン
	緩衝ゾーン

＜自然拠点整備の提案⑤＞江川・三ヶ尾エリア

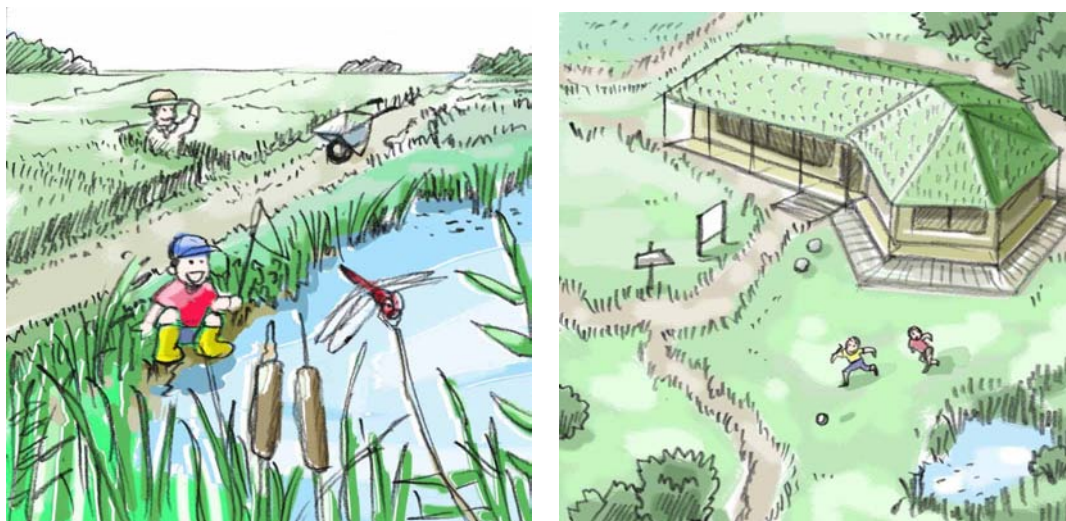


江川・三ヶ尾エリア

□自然の保全・再生・管理に関する提案

- ・ 湿地の再生、里山エコミュージアムとしての整備

江川排水路を中心に両側に水田、斜面林が連続し、オオタカやサシバの生息が確認されるなど、地域において自然環境上、非常に重要なエリアとなっていることから、これらの湿性環境を活かした自然の保全・再生と、水田の市民農園や環境学習への活用など、さまざまな可能性を含めた里山ミュージアム（エコミュージアム）としての保全・再生・活用を進めることが考えられる。



里山エコミュージアムのイメージ

□ 土地所有・管理：民有地、農業生産法人等

□ 課題：土地所有者との調整、農業関連の施策との整合・調整・連携等

現況



- ・「こんぶくろ池自然博物公園整備計画」に基づく保全・管理の実施
- ・「特別緑地保全地区」への指定による土地担保性の確保

こんぶくろ池については、地元住民及び自治体ともに保全する方向で検討・活動を進めていることから、地域における環境保全活動のひとつの拠点として位置づけ、活用していくことが可能と考えられる。



A: 公園の象徴的エリア(こんぶくろ池・弁天池など)
B: 湿性環境を見せながらこんぶくろ池などへ導くエリア
C: バッファゾーン
D: 活動・研究エリア
E: 学びのエリア
F: 憩いのエリア

こんぶくろ池整備基本
計画図（柏市資料）

- 土地所有・管理：民有地
- 課題：特別緑地保全地区指定に向けた調整

(2) 歴史・文化資源のネットワークに向けて

歴史・文化資源については、資源にまつわるエピソード、地域と地域の昔からのつながりなどの「逸話」、視覚的に感じることができる「伝統行事」、「建築物」に大きく分けることができる。「逸話」が後世へと受け継がれていくためには、「逸話」のもつ意味と意義を理解し、それを記録として残し活用していくことが求められる。また、「伝統行事」、「建築物」についても、「その行事がどのような意味をもっているのか」「なぜ、この地に建築物が建てられた（場合によっては移設した）のか」を理解することが求められる。そこで、それぞれの歴史・文化資源がもつ意味や意義について記録し、同時に人々の心の中に意味と意義を記憶として活かし続けていくための検討を行った。

a. 歴史・文化資源を活かすネットワーク

歴史・文化資源を活かすネットワーク形成の軸として、「地域」のつながり、「古道」によるつながり、「渡し」によるつながりの3点から、それにまつわる「意味」・「意義」を含めることで、個々の歴史・文化資源が息づくような結びつきが表れてくると考えられる。本調査では、ネットワーク形成の軸として、「地域」のつながり、「古道」によるつながり、「渡し」によるつながりに着目し、情報をとりまとめ、エコパーク・ツアーの検討材料の参考とした。

●「地域」のつながり

地域のつながりをみるものとしては、集落としてのつながり、行事や慣習によるつながりの2つの観点からのつながりをみることができる。これらの「つながり」を示すものは、地域にまつわるエピソードや、史料や石碑等から確認することができる。本調査では、「地域」のつながりとして確認されている主なエピソードの概要をとりまとめ、表 2-3-1 として整理した。

表 2-3-1 「地域」のつながりとして情報が確認されている主なエピソード

東深井（流山市）の ^{きたかいどう} 北海道の集落
利根運河が開削される前は、ひとつの集落であったが、利根運河により両岸に分かれてしまった集落。地元住民からは、運河開削前の歴史背景などからも、南北を結ぶ架橋の要望がある。
八子新田（吉川市）にある病院と今上（野田市）とのつながり
八子新田にある病院は、江戸川を舟で渡って、今上の人々の往診に出かけていったという話がある。また、この両岸の地域は、農耕馬の貸し借りも行われていた。
江戸川両岸にある吉川市と流山市の深井新田、平方新田と平方という地名
江戸川をはさみ、吉川市、流山市の両市にある深井新田、平方新田、平方という地名は、もともとはひとつの集落であった。江戸川の開削により、集落が別れ行政区分上の所属も分かれてしまった。想像の範囲ではあるが、集落を結ぶものとして、この地域においていくつか確認されている「渡し」を使った往来がなされていたと考えられる。またこの地域には、両岸に六社神社があることが確認されている。
三輪神社と茂侶神社
三輪神社（吉川市）は、もともとは茂侶神社（流山市）の氏子区域であったが、江戸川開削により区域が分断されたため、茂侶神社より分霊し、この地に奉られた。
諏訪神社詣で
東武野田線豊四季駅近くにある諏訪神社（流山市）は、1000 年以上の歴史をもつ神社であり、神社としても規模も大きい。また、近隣からの参詣だけではなく、吉川市からも諏訪神社詣でが行われていたとの記録がある。
守谷市にある三ッ堀への方角を示す道標
利根川を渡って対岸となる三ッ堀（野田市）への道標があることから、渡しをつかって利根川両岸の往来があったことが推定される。

●「古道」によるつながり

古道とそれにまつわるエピソードが周知され、散策や来訪時において新たな楽しみ方を味わうことができると考えられる。目に映る景観を楽しみながら、その地に息づく歴史、地域のつながりを知ることは、何気ない道中にも新たな発見をもたらすことになる。利根運河周辺地域では、利根運河開削以前にも、古くは源義家や徳川家康、勝海舟等の著名人がこの地を訪れているという記録が残されていることが確認された。

また、利根運河開削時には、明治の文豪、夏目漱石が明治22年に銚子から船で利根川を遡上し、野田市三ッ堀の地で下船したことが、松山で療養していた正岡子規に送った漢詩紀行文「木屑録（ぼくせつろく）」に記されているほか、利根運河の竣工式の際には当時の総理大臣、山形有朋がこの地に来訪している。夏目漱石については、野田市三ッ堀から東京に向かったことは確認されているが、舟、陸路を含めてどの経路を利用したのか、現在のところ確定されていない。陸路を利用した可能性が高いと推定されているが、その場合、ルートによっては利根運河開削工事の最中に、開削されるまでの利根運河の地を通過したかもしれないと推定されている。

これらのエピソードから推定された「古道」のルートとして、3つの主な街道及び夏目漱石が利用したと推定されるルートが、この地域の代表的なものと考えられることから、「古道」にまつわるエピソードを表2-3-2に、推定されたルートを図2-3-8にとりまとめた。

表 2-3-2 「古道」にまつわるエピソード

下妻街道	中川の自然堤防上に築かれた古道。源頼義・義家などが奥州鎮圧する際使ったという。その後、鎌倉時代には、政治の中心鎌倉と常陸・陸奥各地を結ぶ主要道路となった。近世に入ると、日光街道と水戸街道の中間に位置し、茨城県下妻方面への脇往還として利用されたことからこの名がついた。 参考資料：草加市「そうか辞典」
成田道	成田街道はもともと江戸時代の始めに、房総の佐倉藩等の参勤交代に利用された道で「佐倉道」と呼ばれていた。江戸中期以降、町民文化が開花し、信仰と行楽を兼ね、成田山へのお参りのため庶民が利用するようになり、「成田道」と呼ばれるようになったといわれている。このため、成田道には、それぞれの成田参りごとに起点が異なり、様々なルートが推測される。 参考資料：千葉国道事務所
日光東往還	日光に埋葬された徳川家康を、歴代将軍が参拝を行うために使われたのが日光街道で、その脇街道として整備された道が日光東往還。御社参のほかに、参勤交代の大名通行路や物資の輸送など庶民の往来も多く、また、俳人小林一茶が旅した道としても有名。街道には一里毎に塚が設けられ、その上に榎木を植え目印としおり、日光東往還には並木も作られていた。 参考資料：千葉県立関宿白博物館、千葉国道事務所
夏目漱石が利用したと推定されるルート	銚子から船で利根川を遡上し、野田市三ッ堀の地で下船したことが、松山で療養していた正岡子規に送った漢詩紀行文「木屑録（ぼくせつろく）」に記されている。陸路を歩き、江戸川から東京に舟運を利用して帰ったと推定されている。 情報提供・調査協力：東葛自然と文化研究所

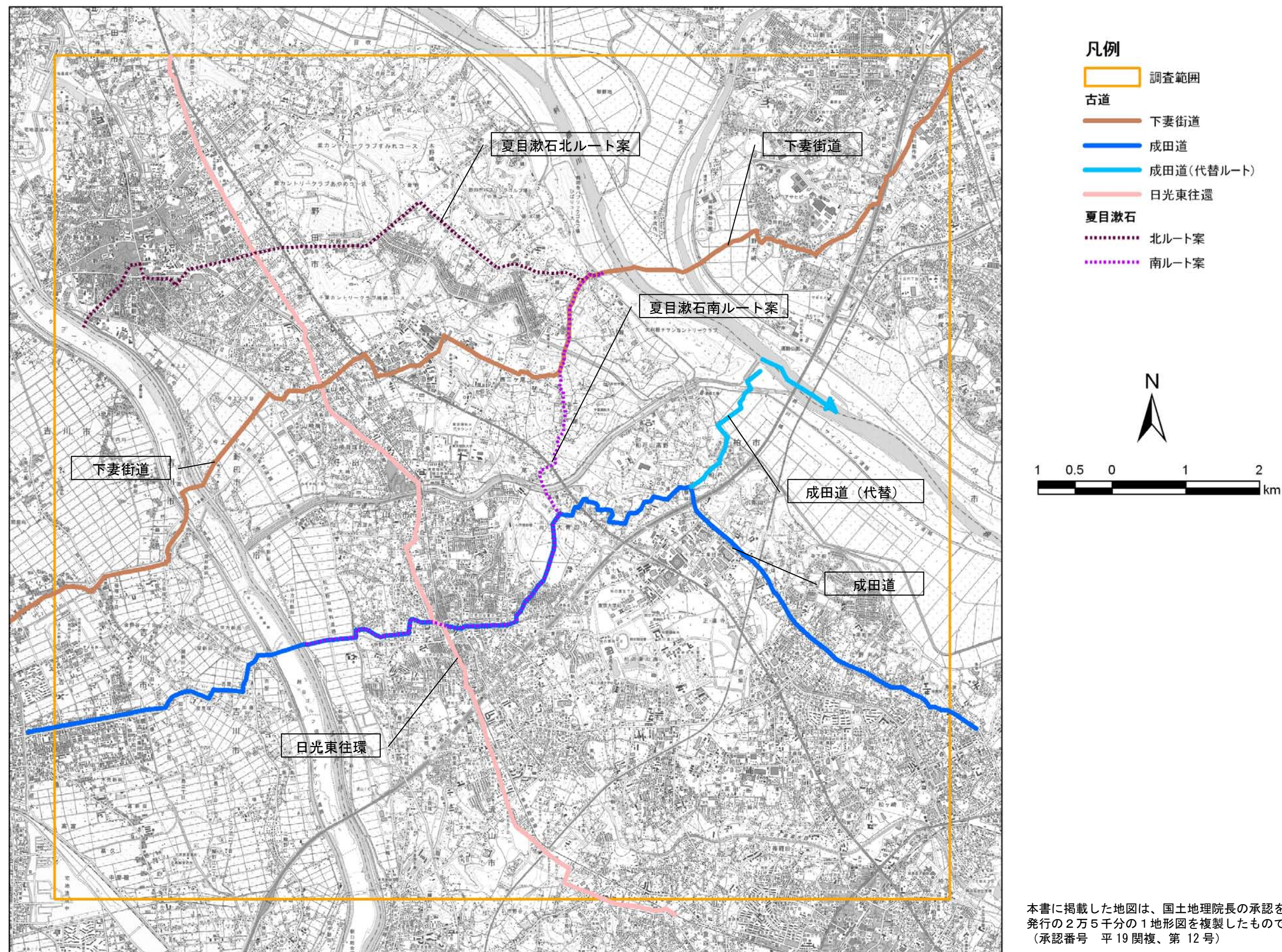


図 2-3-8 エピソードをもっている主な「古道」(下妻街道、成田街道、日光東往還及び夏目漱石が用いたと推定される道)

本書に掲載した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。
(承認番号 平 19 関複、第 12 号)